平成 30 年度

事業所名 : グループホームいさわ

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391500303		
法人名	有限会社 アセットリンク		
事業所名	グループホームいさわ		
所在地	岩手県奥州市胆沢南都田字蛸の手443番地		
自己評価作成日	平成30年10月30日	評価結果市町村受理日	平成31年2月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.mhl.w.go.jp/03/1/index.php?action=kouhyou_detail_2018_022_kani=true&Ji_gyosyoCd=0391500303-00&PrEfCd=03&VerSiOnCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号
訪問調査日	平成30年11月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>美味しい食事と 心地よい環境</p>

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>平坦で自然豊かな環境に位置し、理念の「ともに支えあう」を利用者、家族、地域住民、職員が一体となって取り組み、風通しの良い職場風土となっている。利用者や職員と一緒に楽しく会話しながらの食事風景は、大家族のような雰囲気を醸し出している。協力医療機関と連携した看取り介護、利用者と一緒に家族に会いに出掛ける家庭訪問、介護ロボット眠りスキャンを活用した排泄の自立支援等に取り組んでいる。近隣住民による防災時の協力、野菜差入れ、ボランティアによる朗読会、他福祉施設との合同レクリエーション、登下校時の中学生との交流等、地域に根差した施設として運営している。また、近隣の事業者の協力により避難場所提供や除雪、草刈の支援を受けている。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	月初めの職員会議で理念を唱和している。また、事業所内の目に留まる場所数箇所に掲示し、日々確認しつつ、業務に向き合うようにしている。	毎月第一水曜日の職員会議で理念を唱和するとともに、事務室、ホールに掲示し職員に浸透させている。運営方針は、職員会議で話し合い4月から分かりやすい表現に見直しをしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元の行事には利用者の意向を聞きながら可能な限り参加している。ボランティアさん等の関わりのなかで地元からの野菜の提供もいただいております、大変感謝している。	中学校の通学路になっており日常的に登下校時に声を掛けあっている。地域行事への参加、朗読ボランティアや地元農家等の来訪による交流を行っている。施設周りの除草、徐雪について、近隣の事業所から支援を受けている。他福祉施設との相互訪問による風船パレード等の交流も行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ボランティアさんや入所申込み、施設見学等で訪れた方からの相談対応に出来る限り努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	隔月開催となっている。利用者個人の状況報告であったり事業所として悩んでいる課題など多方面からご意見をいただき改善に活かしている。また、利用者家族から要望を伺えることもあり助かっている。	避難訓練、敬老会等の行事と併せて開催し、一緒に昼食をするなどして利用者や認知症への理解を深めている。オレンジ通信、看取りの支援等について忌憚のない活発な話し合いが行われている。また、委員からは、地元行事やボランティア等の紹介を得て、地域交流に活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	訪問や電話等で情報連携したり、生活保護担当者との連携も行なっている。	市の担当者には、月2,3回訪問して、グループホーム運営や生活保護手続きなどについて、相談し、助言を得ている。防災上の助言は胆沢支所から得ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に身体拘束廃止委員会を開催し理解を深めている。委員会以外でも判断に迷う際は随時検討会を開き原因の究明と解決策を職員全員で取組んでいる。	身体拘束・虐待廃止宣言を行い、ホールに掲示し、毎年度見直ししながら、職員の意識を高めている。職員全員で構成されている身体拘束廃止委員会等で話し方やスピーチロック等について注意を喚起している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員は開かれた関係、協働の精神で業務に励んでいる。早めの気づきと早目の対応を心がけている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修参加者の復命などで学ぶ機会としている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約などの重大な場面ではお互いに緊張しているため、聞き逃し等がないように普段よりゆっくりと、分かりやすい言葉を選んで説明するように配慮している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議、意見箱、お便り、面会、自宅訪問等、その時々状況や雰囲気に合わせてお聞きする機会を設けている。	利用者別の暮らしぶりがうかがえる写真を掲載したオレンジ通信を家族に郵送し、意見等をいただくことにしている。利用者と一緒に家族訪問する里帰り支援を年1回実施し、ゆったりとした時間の中から本音や家族の状況を聞き取る機会となっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の職員会議には事業代表者にも出席いただき、就業規則等の整備や職員厚生事業等の協力を頂いている。	職員会議、ランチタイムミーティング等では、介助の方法等の話し合いが多く、各部屋での清拭を効率的に行うためのカートを整備するなどの職員意見が具体化されている。また、研修や資格取得等の教育訓練機会への積極的な参加を支援している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員不足に対しハローワークへの広告や就業規則の整備と届出(労働基準監督署)等、内事情の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の意欲向上の為、希望する研修や資格取得研修等内外問わず協力的である。助成金の補助制度有。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型小規模多機能型居宅事業所の「見分けの森」と相互訪問のスポーツ交流、「DSあおぞら」との秋祭り交流で質向上を図っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期の段階では環境に慣れていただくことを優先とし、要望が届きやすいよう、まめにコミュニケーション機会をとるよう意識している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	生活歴の聞き取りや事業所での様子等をお伝えするなど、日常の出来事から要望や思いの聞き取りが自然に行えるよう意識している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、ご家族からの聞き取りはもちろん、入所前に利用していたサービス事業者とも連携し情報提供いただいでサービス計画書の作成を検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	事業所側の日課を強要することなく、レクリエーション活動、家事等への参加はご本人の自主性にお任せしている。そのため職員、利用者相互の信頼関係づくりを重視している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族の理解と協力を得たうえでサービス展開できるか検討している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	主が最も大切にしている人間関係を出来る限り維持できるよう、来訪時にはご家族と同様に過ごしやすい場所の提供とコミュニケーションを大切にしている。また、利用者から意向があれば家族と連携し外出支援も検討している。	毎月面会に来る家族等は3名で、お盆には家族、親戚等も多く来所し、居室で会話した後、ホールで職員も交えた談笑となり、利用者の表情が一番良い状態となる。月1回理容師が来所して、新たな馴染みの関係になってきている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事の準備や掃除、洗濯等、何気ない日常の中に数多くのお互いを思いやる場面が見られる。何気ない行動であっても記録に残し共有することで支援につながっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要に応じ、退所後の家族支援を行っている。施設移動した際は入所後訪問し、入所施設へのフォローを行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日によって、または体調によっても意欲や意志に変化が見られるため、毎日の寄り添い支援を大切にしている。心が自然と開ける関係づくりを目標に努力している。	日常生活の中から発せられる言葉や表情などをパソコンに記録しデータ化することにより、利用者の思いや意向の把握に努めている。睡眠状態等を把握するため、介護ロボット(「眠りスキャン」)を活用している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人からの聞き取りの他、家族、親戚等からの情報提供によりサービスに生かすよう努めているが、ここ自体での暮らしに馴染みができている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	開設当初から、日課表のない暮らしを継続しており、利用者個々の今現在の気持ちや生活リズムに合わせた支援を心がけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	アセスメントを重視し、変更の必要性が発生した場合は迅速にカンファレンスを行うこともある。介護計画変更時、更新時には職員全員で話し合いプランに組み入れている。	本人、担当職員、計画作成担当職員で構成されるカンファレンスを行い、家族や職員会議等での意見を参考に、3か月ごとにケアプランを見直している。利用者の趣味や楽しみなどを介護計画に組み込み、より良い暮らしに近づけるよう取り組んでいる。	趣味が読書であれば「図書館に行っ て本を借りる」、飲酒が楽しみであれば「主治医と連携して週4日の少量の晩酌」等と、思いや意向を反映した介護計画となっており、今後とも継続し一層充実されることを期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護ロボットの活用と日常の支援方法から生じるケア方法の見直しを職員間で共有し、カンファレンスにつなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	介護保険更新時に本人と同伴し自宅訪問することで、ケアプランについての意向や希望など話しやすい環境と雰囲気づくりに努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	可能な限り、在宅時と同じフォーマル、インフォーマルな資源活用に努め安心を提供している。買い物等、行きつけの店を希望される方が多い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、ご家族の意向により、またこれまでの生活歴からかかりつけ病院を決めている。家族都合で事業所の医療連携病院による居宅療養管理指導に切り替えるなど、受診選択していただいている。また、其々のかかりつけ病院とは適宜連携し在宅医療を支援いただいている。	利用者の7名は月に1回訪問診療している近隣の開業医をかかりつけ医としている。1名は家族同行で他の医療機関を受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携事業所の看護師さんとは、週1回の巡回訪問の他、緊急時の対応や相談支援等で連携を密にしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には必要な情報提供を家族の了解を得て行い、また実際に病院に出向き、医師や看護師から入院中の状況等について情報共有できる関係を築いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	居宅療養管理指導や医療連携看護師との連携のもと、看取りを経験している。入居時やサービス担当者会議の際に説明している他、ご家族から申し出がある場合がある。	看取り介護は、これまで4事例を経験し、協力医療機関、委託している訪問看護事業所と連携して対応してきた。重度化及び看取りの指針のほか看取り介護パンフレットを作成して、常に家族等に説明できる体制としている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時には、連携先の医療機関・訪問看護師の指示を厳守することに一念している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の防災協力者を選任し、事業所独自の「防災計画書」を作成している。避難訓練は年2回実施し消防署立ち合いで行っている。防災備品の点検も行っている。	年2回夜間想定も含めて、地域の防災協力員等の協力を得ながら避難訓練を実施している。ハザードマップ上で防災上の問題はないが、施設の防災計画で少し高台にある道を挟んだ向かいの工場を避難場所とし、3日分の食糧を備蓄をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎日のミーティング時に介護の振り返りを行ったり、職員同士お互いに声をかけ合い意識付けしている。	利用者の希望による呼称を使って呼びかけている。トイレ誘導もさりげない声掛けを行うなど配慮している。会話では、ゆっくり、はっきり、低いトーンで話すように注意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	習慣化した事象であっても選択肢を設けたり意思決定を求め、言葉を待つように心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	当日の予定を説明したうえで利用者自身の意向を確認し支援している。9人が9通りの暮らしを送っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	其々の習慣や感覚に合わせて行っている。行事や外出の際は化粧をしたり、男性であってもマニキュアに興味のあるかたもいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日協力して行っている。準備や食事に出る会話にはリラックスした内容のものが多く、楽しい時間となっている。	食事は三食とも、職員と同じテーブルで愛用の食器を使い、楽しく会話しながら、穏やかな表情でいただいている。栄養士資格のある職員が献立し調理している。利用者のできる範囲で食器の後片付けの手伝いや食材の買い出しと一緒にしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が先頭になり改善に取り組んでいる。昨年改善が見られた高血圧・糖尿病についても維持している。摂取時間やタイミングなど利用者のニーズに合わせて提供し、完食できる工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	地域の口腔ケア研修に参加したり、連携歯科医に直接指導を受けている。個別ケアは1日3回実施し習慣化している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ミーティング時にパターンの確認と新しい情報を共有し、自立支援を念頭に置いた支援方法を実施している。	排泄チェック表により排泄パターンを把握し、全員がトイレで排泄できるよう支援している。4台ある介護ロボット眠りスキャンを活用して眠りの状況を把握し、夜間のトイレ誘導に活用している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取の支援の徹底と繊維質のある食材をふんだんに使った食事、運動機会の確保を基本支援としているが、それでも自然排便が難しいかたには医療連携のもと下剤使用にて早期の対応を心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本入浴したい時に利用可能な状態だが、自然と週2回の利用に落ち着いている。便失禁の際に臨時で対応したり、就寝前に足浴を実施するなど個別対応している。	週2回の入浴を基本とし、月火木金の午後に充てている。30分～40分位をかけて会話したり、歌をうたったりしながらゆっくり入浴を楽しんでいる。睡眠を誘導する目的で夜間に足湯を提供することもある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝に向けた支援の実施や介護ロボを使用した管理により、睡眠の質を理解し日中のケア内容に活かしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者処方箋はファイルし、職員は効能・副作用等について一覧を作成し、理解に努めている。処方内容が変わった際は訪問看護師に内容を伝え、連携して支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の重度化によりこれまでと楽しみ方が変わってきている。その中でも、すいとん作り、干し柿、たくあん漬けなど暮らしに関わる事柄は気持ちが安定するようす。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者自身が外出に気後れする傾向にある。日常の会話や行動から思いの汲み取りに努め、出来る限り希望に応えられるよう意識している。ご家族の協力のもと、お墓参りやドライブに出かけられるよう個別支援している。	日当たりの良いウッドデッキでお茶を飲みながらの外気浴も日課の一つである。近くの公園までの散歩の道すがら、老人クラブの会員や保育園児と挨拶を交わすこともある。登下校の中学生とのあいさつ、他施設との相互訪問に加え、食材の買い出しにスーパーに行きカートと一緒に引いて楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は実施していない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	お電話やお便りには即対応している。電話はコードレスなのでいつでもどこにいても通話が可能である。遠く離れたご家族へは「おれんじ通信」をお送りし、普段の様子をお届けしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間空間は天井が高く、拭き抜け屋根からの採光が眩しく明るい。皆さんはここで過ごされている。	調理場、食堂、談話室が一体となったホールは、天井が高く明るい。利用者は、寝るとき以外の時間はほとんどホールで過ごし、職員作成の方言かるたに興じたり、歌をうたったりするなど、くつろぎ、笑い声が絶えない空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	日中であれば日光の差し込む廊下に椅子を移動して井戸端会議をしたり、事務室を開放してお茶っこ飲みをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	普段は居室に居ることが少なく「寝る部屋」との認識が強い為か、関心が薄いように感じる。利用者一人ひとりの個性によっては、在宅時の家具を大切に使用していたり、好きな風景や家族、知り合いの写真を飾ることで安心感を得ているかたもいる。	清潔感があり整理整頓が良く行き届いている。足元付近にもものがなくスッキリして安全面に配慮され、思いの写真、テレビ、小タンス等が置いてあり、自分の空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	洗濯物を自分で取り入れたり、食器を片付けたり仲間のぶんまでお茶を汲んだりと安全が守られる範囲でできることを制限しない暮らしを続けている。		